

「ペスト」を題材に 米沢東高生読書会



「ペスト」を読み、「誠実」について考えを出し合う生徒
＝米沢市・米沢東高

感染症が流行した町で治療に当たる医師や患者、新聞記者らの様子を描いたフランスの作家・カミユの代表作「ペスト」を題材にした読書会が30日、米沢市の米沢東高（平塚志信校長）で開かれた。小説の舞台は現在に通じる境遇。誠実をテーマにした意見発表では「やるべきことをつらくても続けること」などと、生徒たちが作品

を通じた考えを披露した。

「ペスト」は当時、フランスの植民地だったアルジェリアを舞台に、理由もなく人々に襲いかかる病と死の恐怖、政治の責任逃れ、病気に立ち向かう人々の苦悩と勇気などを描いた。1947（昭和22）年の作品だが、新型コロナウイルス感染症が世界中に広まっている現在、再び注目が集まっている。読書会は作品中と同じ不条理な状況下でどう生きるかを学んでほしいと企画し、生徒21人が参加した。

県立米沢栄養大と県立米沢女子短期大の学長で、フランス文学が専門の阿部宏慈氏が講師を務めた。阿部氏は登場人物の様子などを挙げ、「フランス語での『誠実』は、自分に忠実であろうとすることを意味する」などと解説した。生徒たちは、それぞれが気になった登場人物をピックアップし、自分が思う「誠実」について考えを披露した。

具体的には「人のために尽くすこと」「自分だけでなく他人のことを考えること」「自分の意思を貫き、見返りを求めず周りの人を支えることができる人」などが出ていた。

（安達一智）

変わる社会 生きるヒント